The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	フローベールの小説における時の流れ
Author(s)	金崎, 春幸
Citation	Gallia. 2011, 50, p. 142-150
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/4853
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

フローベールの小説における時の流れ

金﨑　春幸

フローベールの作品には、作家の生きた時代を描いたものと、古代を扱ったものとに大きく分かれることは、広く知られている。前者の系列には『ボヴァリー夫人』、『感情教育』、『純な心』、さらに遺作の『ブヴァールとペキュシェ』があり、後者には『サラムボー』、『聖アントワーヌの誘惑』、『エロディアス』が属する。中世の聖者をとりあげた『聖ジュリアン伝』は、時代としてはその中間にあたると考えられる。

意外に知られていないことだが、古代を舞台とした作品の冒頭および結末では、必ず日の出や日没の時間の光景が描かれる。『聖アントワーヌの誘惑』がその典型だが、日没で始まり、一夜の誘惑劇を経て、日輪の光が差し込むとき作品は閉じる。『エロディアス』も、朝日の上る前にアンティパスがマケルス城から四方を眺める場面で始まり、翌日の朝、ヨカナンの首を三人の男たちが持ち去るところで終わる。『サラムボー』は一晩や一日だけの出来事が描かれるわけではないが、冒頭で傭兵たちが饗宴に集まってきたとき太陽が沈み、最後の場面で陽が沈むとき傭兵隊長マトーの心臓は鼓動を止める。古代において、時を刻むのは時計や鐘の音ではなく、太陽の動きであり、そのような古代人の心性が、作品の中に浸み込んでいるのであろう。

ここでは、古代を舞台とした小説から『サラムボー』(1862)、フローベールと同時代を描いた小説から『感情教育』(1869) をとりあげて、彼の作品における時間の経過の特徴を考えてみたい [1)]。二つの小説は、時代も場所も全く異なるものの、前者はカルタゴの傭兵反乱、後者は二月革命という歴史的事件を題材にし、またどちらも、歴史的時間との齟齬が研究者から指摘されているという共通点がある。

『サラムボー』における時間

『サラムボー』の物語は、ギリシアの歴史家ポリュビオスの『総史』第1巻に描かれたカルタゴの傭兵反乱を素材としている。ポリュビオスの記述によれば、カルタゴと外国人傭兵との戦いは「3年と4ヵ月ほど続いた」という [2)]。紀元前241年に第一次カルタゴ戦争が終結し、その戦争での報酬をめぐって傭兵の不満が爆

1）二つの小説における時間については、以下の拙稿を基にして、まとめ直した：«Remarques sur la chronologie de *L'Éducation sentimentale*»,『言語文化研究』第12号, pp. 257-271, 1986 ;「『サラムボー』における時間の構造」,『言語文化研究』第14号, pp. 263-281, 1988.

2）*Histoire de Polybe*, nouvellement traduite du grec par Dom Vincent Thuillier, Amsterdam, Chaletain et fils, 1753, Tome II, p. 60. フローベールはポリュビオスに関する情報を、ギリシア語原文からではなく、この仏訳から得ている。

発したのだから、ポリュビオスに従えば、反乱は紀元前 241 年の後半から 238 年の末にかけて続いたことになる。フローベールも小説の終わり近く、反乱が鎮圧された時点で、「戦争が続いたこの 3 年来」と述べており [3]、小説全体の時間の経過をポリュビオスの記述に沿って考えていたことが分かる。しかし、ポリュビオスは個々の戦闘がいつ起こったかについては何も語っておらず、他に資料もないので、作家は戦局進行の時間設定を自分でつくりあげるしかなかった。

『サラムボー』の中には、時間標識として、日付があらわされるのが 3 箇所、月名のみでてくるのが 3 箇所あるが、年号の類はない。日付や月名が明示されるのは、全体で 15 章あるうち 4 つの章に限られる。まず第 7 章で、元老たちの一人の口から、タニット神の聖衣が盗まれたのが「タムーズ（第 4 月 [4]）の朝」だという言葉が発せられる [5]。また、ハミルカルが自分の宮殿に戻るのが「シェバール（第 11 月）」[6]、次の第 8 章で、彼は「ティビ（第 10 月）の第 3 日」にマッカール河畔に向けて出発する [7]。第 9 章でカルタゴは「エルール（第 6 月）」の暑さに悩まされる [8]。第 13 章、傭兵軍の最初の攻撃は「シェバール（第 11 月）の第 13 日」に始まり [9]、新たな攻撃が始まるのが「ニッサン（第 1 月）の第 7 日」と記される [10]。これらの日付や月名に、季節の言及をからめ、さらに何日後といった標識を頼りに小説冒頭の宴の場面から最後のマトー処刑までに経過した時間を加算していくと、少なく見積もっても 57 ヵ月、つまり 5 年近くなってしまう。最初の 1 カ月ほどは戦闘らしきものはないのだが、それを差し引いても 3 年余りという枠組みを大幅に超過してしまう。

『サラムボー』のクロノロジーに関するこのような矛盾を最初に指摘したのは、P. B. フェイである [11]。最大の問題点は第 13 章のカルタゴ包囲攻撃の際の「夏の終わり」という季節の挿入にあるとフェイは考えている。傭兵軍の最初の攻撃は「シェバール」つまり太陽暦の二月に始まり、やがてカルタゴの町には水が乏しくなって「夏の終わりに、黒い大きな蠅が戦う者たちを苛」み [12]、また新たな攻撃が「ニッサン」つまり四月に始まるのだから、一回目の攻撃から新たな攻撃まで 14 カ月経過したことになる。ところが、傭兵たちの最初の攻撃の直前に、ハミルカルは「貯水池には 123 日分の水が残っている」と言明しているのに、一年以上経った新たな攻撃のときにもまだ傭兵軍の攻城櫓を押し流すほどの大量の水が貯水池

3）Gustave Flaubert, *Salammbô*, Introduction, notes et relevé de variantes par Édouard Maynial, Garnier Frères, 1961, p. 341. 以下、『サラムボー』からの引用はガルニエ版に拠り、単に *Salammbô* と表記する。
4）カルタゴ暦は太陰暦で、一年は春分を起点として 12 月の月に分けられ、タムーズは第 4 月にあたる。以下、本稿ではカルタゴ暦で何番目の月にあたるかを記していく。
5）*Salammbô*, p. 135.
6）*Salammbô*, p. 140.
7）*Salammbô*, p. 167.
8）*Salammbô*, p. 197.
9）*Salammbô*, p. 261.
10）*Salammbô*, p. 276.
11）P. B. Fay, «The Chronogical Structure of *Salammbô*», in *Sources and Structure of Flaubert's* Salammbô, Baltimore, The Johns Hopkins Press, 1914.
12）*Salammbô*, p. 267.

に蓄えられている。フェイによれば、このような矛盾はすべて「夏の終わり」という箇所から発するのであって、これを除いて考えるとカルタゴ包囲の際の最初の攻撃から新たな攻撃まで2ヵ月しか経っておらず、したがって小説全体で経過した時間も4年弱になり、ポリュビオスの記した時間枠に近づくことになる。

フローベールは小説執筆に先立ってプランやセナリオをつくっているが、そこには各エピソードや戦闘が何年目の何月頃という設定は見当たらず、時間的な面での整合性を追求した痕跡はない。しかし、小説のクロノロジーに矛盾があるからといって、作家の無頓着さを責めてもほとんど意味のないことであろう。今は、小説全体がどのような時間のリズムをもっているのか、そこにどんな意味があるのか、見ていきたい。

本稿冒頭で述べたように、フローベールの作品には一晩あるいは一日だけの出来事が描かれるものと、多くの時間が流れるものがあるが、『サラムボー』を構成する15の章も同様に分けることができる。第1章はシチリアにおける戦勝記念日に傭兵たちがハミルカルの宮殿の庭に集まり、一夜の宴が催される。第3章では、ある夜、サランボーが宮殿のテラスでタニット神を讃え、第5章では、夜、スペンディウスとマトーがタニット神殿で聖衣を盗んだ後、サランボーの宮殿に入り、夜が明けて二人は逃げる。このように第1章、第3章、第5章では、ほぼ一晩の出来事が語られ、いずれも夜明けあるいはそれに近い時間で終わる。それに対して、第2章、第4章、第6章では複数日が経過し、しかもその正確な日数は把握できない。

第7章は、ハミルカルを乗せた船がカルタゴに近づいてきた朝から、次の日の晩の元老院会議で終わる。つまりはじめて二日間が一つの章で経過することになり、この章が小説全体の時間のリズムの転換点になっていることが分かる。第8章、第9章、第10章では、日付や月名を含む章があるものの、章全体としてどれくらいの日数が経過したのかは把握できない。第11章では、サランボーが夜が白みはじめた頃カルタゴの城壁を出て、翌日の夜マトーのテントで聖衣を奪い返し、ハミルカルの陣営に向かうところで夜が明けようとする。ここでは、第7章と同様に、二日が経過している。カルタゴ軍と傭兵軍との本格的な戦闘が続く第12章から第14章では、日付、月名、季節のほかに何ヵ月後という時間標識が数多く出てくるが、一つの章の正確な日数は分からない。そして第15章は、傭兵軍に対する戦勝記念とサラムボーの結婚式が行われる日、太陽が傾き始める頃マトーの処刑が始まり、マトーの死とともに太陽が没する。

全15章を概観して気づくのは、章ごとの時間の枠組みに規則性が見られることである。一日にせよ二日にせよ経過した日数が正確につかめる章をA、そうでない章をBとすると、小説全体ではABABABABBBABBBAとなる。第6章まではABが三度繰り返され、第7章から第14章まではABBBが二度繰り返されて、最後にAがくる。そして第6章までのAと最終章では一日（正確に言えば24時間以内）、第7章から第14章までのAでは二日（24時間から48時間までの間）が経過しているといったように、一定のリズムに従って章が構成されているのである。

このリズムをかたちづくるものは何であろうか。すでに見たように、第1章はシチリアにおける戦勝記念日であり、第15章は傭兵軍に対する戦勝記念とサラムボーの結婚式、そしてマトーの処刑がおこなわれる日であって、ともに饗宴が催される。ただし第1章は、宴の最後に日が昇る場面で終わるが、第15章では、サラムボーの死によって宴は中座し、その結果最後の章では最初の章とは逆に日没で終わっている。この両端の章の関係を明確にするために、第1章の日の出の場面と第15章の日没の場面を引用してみよう。

> Une masse d'ombre énorme s'étalait devant eux, et qui semblait contenir de vagues amoncellements, pareils aux flots gigantesques d'un océan noir pétrifié.
>
> Mais une barre lumineuse s'éleva du côté de l'Orient.（...）
>
> Il [= le soleil] parut ; Spendius, levant les bras, poussa un cri.
>
> Tout s'agitait dans une rougeur épandue, car le Dieu, comme se déchirant, versait à pleins rayons sur Carthage la pluie d'or de ses veines[13].

> Le soleil s'abaissait derrière les flots ; ses rayons arrivaient comme de longues flèches sur le cœur tout rouge. L'astre s'enfonçait dans la mer à mesure que les battements diminuaient ; à la dernière palpitation, il disparut.
>
> Alors, depuis le golfe jusqu'à la lagune et de l'isthme jusqu'au phare, dans toutes les rues, sur toutes les maisons et sur tous les temples, ce fut un seul cri（...）[14].

二つの場面に対応関係を見出すことは難しくない。引用の最初の文で夜の闇が大洋の波 «flots» に喩えられていてそこから太陽が昇るのに対して、第15章では、海の波 «flots» の背後に日が沈む。第1章の引用の最後では太陽が「自らを引き裂くようにその血管から金の雨をカルタゴにさんさんとそそぐ」のに対し、最後の章ではえぐりとられた「真赤な心臓」の「鼓動が弱まる」のに合わせて日が沈む。もちろん第15章では現実の波や心臓が問題になっているのだが、第1章ではそれらが比喩のかたちで予感されている。この二つの場面を合わせてみると、あたかも太陽が一つの生命体で、海のごとき夜の闇から昇って地上に血をほとばしらせ、最後にはマトーの心臓の動きと同化して海に没するように描かれていることが分かる。このような太陽に対する反応はどうかと言えば、日が昇るときにはスペンディウスが叫び声 «un cri» を発し、沈むときにはカルタゴ全体が «un seul cri» となって響きわたるといったように呼応している。

このように第1章の太陽が昇る場面と第15章の太陽が沈む場面とが対になっていることから、小説全体で太陽の動きそのものが重要な役割を果たしていることがうかがえる。ただし、この太陽は単なる天体ではなく、第1章で引用した部分

13）*Salammbô*, pp. 17-18.
14）*Salammbô*, p. 352.

にあったように «Dieu» つまり太陽神として描かれているのである。したがって太陽は天体として時を刻むだけでなく、神として君臨し、第 1 章の最後で夜の闇から姿をあらわし、やがて高く昇り、最後にはその生命を終えて海に没する。

この太陽神は第 7 章で、モロック神と一体となる。カルタゴのモロック神殿に朝日が差し込むところでは、まず太陽が波間から昇ると（«Le soleil, sortant des flots, montait»）、モロック像は日の光に生命を吹き込まれ（«le grand jour l'animait»）、「外へ飛び出して、この天体、神と溶け合うことを望んだかのように」（«comme s'il avait voulu bondir au dehors pour se mêler avec l'astre, le Dieu»）と描かれるほど、太陽神と一体化する[15]。そしてこのモロックは第 13 章の最後で、生贄を飲み込むとき、全身が血で覆われたように真赤になり（«complètement rouge comme un géant tout couvert de sang»）、そこでは子供を失った母親の叫び声に包まれる（«on entendait les cris des mères»）[16]。このように第 1 章の夜明けの場面や第 15 章の日没の場面で出てきた「波」「血」「叫び」といった要素が、第 7 章のモロック神殿に朝日が差し込む場面と第 13 章の生贄の場面を合わせた全体で再現されている。先に見た章ごとの時間のリズムが、第 7 章でモロックが太陽神と一体化して生贄を欲するようになってからは、それまでの AB 交代のリズムとは異なるリズムとなることも、モロックの影響の大きさのあらわれなのかもしれない。

以上のように、この小説の時間を支配しているのは、神としての太陽であり、太陽神はときにはモロック神と一体となって猛威を振るう。月の神タニットを護るサラムボーが登場するときは、月の動きも描かれるのだが、やはり太陽と比較すると影が薄い。フェイが指摘する第 13 章の「夏の終わり」の挿入も渇きを夏の暑さに結びつけることによって、傭兵たちを窮地に追い込む太陽神の絶大な力のせいだと考えざるをえない。つまり、ポリュビオスの設定した歴史的時間とは異なる時間が『サラムボー』には流れており、それは宗教的時間、神話的時間としか言いようのないものなのである。

『感情教育』における時間

『感情教育』の時間設定は、『サラムボー』よりは明確である。フレデリックは「1840 年 9 月 15 日」にアルヌー夫人と出会い[17]、「1845 年 12 月 12 日」に叔父の遺産相続の手紙を受け取る[18]。マルティノンとセシルの結婚が「1850 年 3 月」[19]、アルヌー夫人の最後の訪問が「1867 年 3 月の終わりころ」であると記される[20]。しかし、意外なことに 1848 年 2 月の革命のことは描かれていても、その年号や月の記載はない。そのほかさまざまな歴史的な事件やトピックに関する言及はあるが、それ

15）*Salammbô*, p. 137.
16）*Salammbô*, pp. 298-299.
17）Gustave Flaubert, *L'Éducation sentimentale Histoire d'un jeune homme*, Introduction, notes et relevé de variantes par Édouard Maynial, Garnier Frères, 1964, p. 1.　以下、『感情教育』からの引用はガルニエ版に拠り、*L'Éducation sentimentale* と表記する。
18）*L'Éducation sentimentale*, p. 97.
19）*L'Éducation sentimentale*, p. 366.
20）*L'Éducation sentimentale*, p. 419.

らの知識がなければいつのことかは判然としない。

『感情教育』は全体が三部構成で、各々が6、6、7の章に分けられている。『サラムボー』のときのように、時間の枠組みを見てみると、第1部第1章は「1840年9月15日」の出来事、次の第2章はその日の晩のデローリエとの再会、そして第3部第6章は「1867年3月の終わりころ」のある日アルヌー夫人が訪ねてくる。最後の第7章は「この冬の初めころ[21]」のある日デローリエと再び会う。このように最初の二つの章、最後の二つの章だけが一日の出来事であり、真ん中のほかの章はすべて、複数の日々（ほとんどの場合、何日経過したか分からない）が過ぎるという設定になっている。上に挙げた遺産相続の手紙を受け取った日と、マルティノンの結婚の時期だけが離れ小島のように浮かび上がり、そのほかは歴史的な事件やトピック、あるいは季節の推移などをたどりながら、読者はいつの出来事なのか判断することになる。小説の中で、1840年の9月からほぼ28年の時が過ぎることは確かなのだが、時間標識は乏しく、茫漠とした時間が流れているような印象がある。

上記の離れ小島のように明記された日付にも、問題がないわけではない。フレデリックが遺産相続の手紙を受け取るのが「1845年12月12日」で、その後すぐにパリへと向かうのだが、パリのサロンや友人たちの口から耳にする話題はほとんどが1847年の初めのものである。アラン・レイトは自分が編纂した『感情教育』の版の注で、これは単なる誤りであり、1845を1846と読みかえる必要があると述べている[22]。レイトの説は一見突飛なようで、実はテクストの流れに沿ったものだと言わざるをえない。

そのほかにも、1844年に世間を騒がせたはずのプリッチャード（タヒチのイギリス領事）の名が、小説では1841年12月のカルティエ・ラタンでのデモの中で«À bas Prichtchard!»という叫びの中に出てくること[23]、フレデリックの子供を身ごもったことを1849年1月に告げたロザネットが、男の子を産むのは1851年2月であり[24]、妊娠期間が2年以上にもなることが研究者から指摘されている[25]。それらの時間的な矛盾が単なる誤りなのか、あるいは意図的なものかを判断するのはきわめて難しい。読書ノートに記された歴史的事実からある程度推論することも可能だが、ノートに書かれたことを忘れて、あるいは無視して作家が執筆することもあるわけだから、どこまで意図的であるかを断定することはできない。とにかく、フローベールは、『サラムボー』で見たように、あまり厳密に時間設定を考えない作家であり、テクストの時間の流れに身を任せるという傾向があるのは事実である。

21）*L'Éducation sentimentale*, p. 426. なお、「この冬」（«cet hiver»）とは、小説が1869年に出版されたことを考慮すると、1868年から1969年にかけての冬だと判断される。

22）Gustave Flaubert, *L'Éducation sentimentale Histoire d'un jeune homme*, Texte présenté et commenté par Alan Raitt, Imprimerie Nationale, 1979, Tome I, p. 334.

23）*L'Éducation sentimentale*, p. 29.

24）*L'Éducation sentimentale*, p. 360 & p. 386.

25）Joseph Pinatel, «Notes vétilleuses sur la chronologie de *l'Éducation sentimentale*», in *Revue d'histoire littéraire de France*, janvier-mars 1953, p. 63.

それでは、テクストの時間の流れとは何なのか。今、第3部第1章のフォンテーヌブローの場面を見ながら、考えてみたい。

二月革命の後の混乱が収まらない1848年6月21日（この日付はテクスト上にはない）、「労働大臣はその日に18歳から20歳までの全市民に兵役につくか、あるいは地方へ行って土地を耕すかを勧める布告に署名し」[26]、この布告に憤慨した市民たちはパリの大通りを埋め尽くす。パリの騒がしさに嫌気がさしたフレデリックは翌日から（«dès le lendemain»）ロザネットとともにフォンテーヌブローへでかける[27]。その次の朝早くから（«Le matin de bonne heure»）二人は城を見物しに行き[28]、その日の晩新たに到着した旅行者からパリで暴動が起こったことを耳にする。翌日（«Le lendemain»）二人は森の中の狼谷や妖精池などを見物し、さらに翌々日（«le surlendemain»）はあてもなく森に馬車を走らせる[29]。また、ある日（«un jour»）砂の丘に行き[30]、その晩に（«Ce soir-là»）セーヌ河の畔の旅籠屋で食事をするかと思えば[31]、ある日（«un jour»）牧場の裏のプラタナスの樹の下で語り合う[32]。しかし、日曜日の朝（«Le dimanche matin»）フレデリックは新聞の負傷者リストにデュサルディエの名前を見て、すぐパリへ戻ることを決める[33]。苦労の末、パリに着いたフレデリックが見たものは暴動のひどい傷跡が残る街だった。

この六月暴動の場面を執筆するにあたって、フローベールが詳細なノートをとって準備していたことは言うまでもない。労働大臣の布告が出されたのが6月21日水曜日、その翌々日の23日金曜日に市民たちが一斉蜂起し、次の24日土曜日には国民軍が反撃して暴動を鎮圧する。25日日曜日のパリにはまだ暴動の跡形が深く残っている。小説の中で、パリに戻ったフレデリックにヴァトナ嬢が「土曜日」に国民軍の兵士によってデュサルディエが傷を負ったことを告げていることを見ても[34]、歴史的時間と小説の中の少なくとも定冠詞付きの時間標識とはぴたりと合う。つまり、フォンテーヌブロー城を見学した日は23日金曜日で、その日の晩に暴動のことを伝え聞く。狼谷や妖精池を見学した「翌日」は24日土曜日、あてもなく馬車を走らせた「翌々日」は25日日曜日ということになる。ところが新聞でデュサルディエの名前を見てパリに戻るのもまた、25日日曜日なのである。テクスト上は、「翌々日」つまり25日日曜日の中に「ある日」また別の「ある日」という不定冠詞付きの時間標識がはさまるという奇妙なかたちになっている。歴史的事実と照合すると4日しか経っていないはずなのに、テクストではかなりの日数が、フォンテーヌブローで経過していることになる。

では、どんな時間が流れているのか。フォンテーヌブローの森の描写を見てみ

26）*L'Éducation sentimentale*, p. 319.
27）*L'Éducation sentimentale*, p. 320.
28）*L'Éducation sentimentale*, p. 321.
29）*L'Éducation sentimentale*, p. 324.
30）*L'Éducation sentimentale*, p. 326.
31）*L'Éducation sentimentale*, p. 327.
32）*L'Éducation sentimentale*, p. 328.
33）*L'Éducation sentimentale*, p. 332.
34）*L'Éducation sentimentale*, p. 336.

よう。

> La lumière, à de certaines places éclairant la lisière du bois, laissait les fonds dans l'ombre (...). Au milieu du jour, le soleil, tombant d'aplomb sur les larges verdures, les éclaboussait, suspendait des gouttes argentines à la pointe des branches (...); en se renversant la tête, on apercevait le ciel, entre les cimes des arbres[35].

まず「光」が「闇」の中に差し込み、次いで「太陽」と「空」が見えてくる。この引用の後で、ブナやトネリコやヒイラギといった樹木の名前があり、さらに栗鼠や牝鹿や仔鹿といった動物たちも登場する[36]。この一連の場面は、まるで創世記の天地創造の場面を再現したかのように描かれている。混沌の中に、神は闇から光を分け、天体と天を創造し、植物、そして動物をつくる。原初の混沌は、引用にある「広大な緑」や「木々」によって表現されていると考えていいだろう。神は命名することによって、混沌から世界を創造していく。旧約聖書では、最後に人間をつくったことが語られているが、それもある男がいきなりロザネットの前にあらわれて「箱の中の三匹の蝮」をみせたエピソードに反映しているのであろう[37]。この男は蛇に誘惑されたアダムの再来なのかもしれない。

もちろんフレデリックとロザネットは神でもなければ、アダムとイヴでもない。天地創造を 19 世紀に再現したパノラマの単なる観客にすぎない。重要なことは、二人の登場人物は、六月暴動の歴史的時間を生きているのはなく、たとえ観客としてであっても、フォンテーヌブローの森の中で、宗教的時間、神話的時間を生きていることである。

フォンテーヌブローの森の場面では、フローベールが意図的に歴史的時間とは異なる時間を挿入したと思われるが、そのほかの場面ではどれほど意識していたのかを判断するのは難しい。ただ、時間的矛盾を起こしている箇所は、不思議とロザネットにからむ場面が多い。彼女の妊娠期間が二年を超えることはすでに述べたが、フレデリックがロザネットの姿を初めてパレ・ロワイヤルの劇場で見たときも、時間的な面で矛盾を生じている。ロザネットとヴァトナ嬢が劇場にいるのを見たのが 1841 年の冬のはずなのに[38]、その後アルヌー家でヴァトナ嬢と会ったとき「前の夏、パレ・ロワイヤルで見かけた女」だとフレデリックは思う[39]。これはフレデリックの勘違いのようにも読めるが、フォンテーヌブローで彼は最初に姿を見かけたときの「正確な日付」をロザネットに言い[40]、彼女も否定はしない。とにかく、すべてがこんがらがっていて、登場人物の勘違いなのか、語り手によ

35) *L'Éducation sentimentale*, p. 325.
36) *L'Éducation sentimentale*, pp. 326-327.
37) *L'Éducation sentimentale*, p. 327.
38) *L'Éducation sentimentale*, p. 25.
39) *L'Éducation sentimentale*, p. 36.
40) *L'Éducation sentimentale*, p. 331.

るものなのか、あるいは単に作家が間違えただけなのか、何とも言えない。ただ一つ言えるのは、ロザネットというきわめて世俗的な人物に時間的な矛盾がついてまわり、特にフォンテーヌブローの森の場面では宗教的な時間ともいうべきものが現出する一方、フレデリックにとってはすべてがそこから発するような存在であるアルヌー夫人には時間軸を揺るがすものはないことである。

では、なぜロザネットなのか。それを解くヒントが小説の末尾でフレデリックとデローリエによって語られる「トルコ女」のエピソードにあるように思われる。「1837 年の夏休み」に、フレデリックはデローリエとともに、トルコ女と呼ばれる娼婦の館に行き、緊張のあまり、何もできずに逃げ出してしまう[41]。しかし、二人は話の最後に「あれが一番よかった」(« C'est là ce que nous avons eu de meilleur ! ») と言う[42]。フレデリックにとっておそらく人生最初の失敗が一番よかったとすれば、小説で描かれたあらゆる感情教育は価値を失ってしまう。しかもこの失敗は、1837 年の夏という、小説冒頭のアルヌー夫人との出会いよりも 3 年以上前の出来事なのである。

小説全体を時間の観点から見ると、以下のようになる。まず「1840 年 9 月 15 日」に始まり「1867 年 3 月の終わりころ」に終わるアルヌー夫人の物語があり、その時間は歴史的な時間と整合し、矛盾を引き起こさない。その背後に、むしろ実際には遡るかたちで、トルコ女という娼婦の物語があり、それ自体は時間的な矛盾を伴わないが、小説の最後で登場人物のあらゆる経験を否定するようなかたちになる。トルコ女の否定的な役割は小説の中では、ロザネットという高等娼婦が担い、その存在が時間的な歪みを随所で引き起こし、いわばアルヌー夫人を頂点とする時間的な秩序を揺るがすことになる。フォンテーヌブローの森では、「1837 年の夏休み」を遥かに飛び越えて、世界の原初へ、人類の原初へと遡って、六月暴動の歴史とはまったく異なる世界を提示することになる。

このように、作家と同時代を扱った『感情教育』も、古代を舞台とした『サラムボー』と同様に、歴史的時間の枠を超えた宗教的時間ないしは神話的時間を読みとることができた。フローベールにとっては、ローマ帝国に滅ぼされる前のカルタゴの街も、19 世紀のパリの街も、小説の中では同じような時間が流れているのかもしれない。

『サラムボー』の時間を支配するのが太陽の動きであるとすれば、『感情教育』の時間を支配するのは、水の動きとでも言えばよいだろうか。あるときはセーヌ河を進む船のゆったりとした動き、あるときはパリの街の通りを進む馬車の流れ、二月革命のときは大通りに押し寄せる群衆の波となる。そしてフォンテーヌブローも森の中を川が流れるだけでなく、地名自体が「泉」(fontaine) から発している。やはり、水の流れはときには歴史的な時間に覆いかぶさり、神話的な時間をつくりだすのである。

(大阪大学教授)

41) *L'Éducation sentimentale*, pp. 426-427.
42) *L'Éducation sentimentale*, p. 427.